

令和2年 **10**月の**安らぎ**通信

目次

- (1)  海底地滑りで大津波発生 「対象外」の脅威、対策急務
- (2)  強力台風の接近、増加 日本近海で水温上昇
- (3)  太平洋側に接近の台風増加 東京は1.5倍 温暖化影響も
- (4)  災害時、百均グッズで乗り切る
- (5)  線状降水帯に「注意情報」 気象庁 豪雨警戒、来年から
- (6)  老朽インフラ 点検形骸化 橋やトンネル 未修繕5割

(1) 海底地滑りで大津波発生

「対象外」の脅威、対策急務 関東大震災や駿河湾で痕跡

*地震に伴う海底の地滑りによって、大津波が起きることが分かってきました。

*これまで防災研究の対象外だった脅威が見えてきました。

*従来、大津波はマグニチュード（M）8以上の巨大地震が起こすと考えられてきました。

（2020年9月7日 日本経済新聞記事より抜粋・引用）

(2) 強力台風の接近、増加 日本近海で水温上昇

*近年、勢力を強めた台風があまり衰えないまま日本に接近、上陸する例が目立ちます。

*気温と日本の南方の海水温の上昇によって台風が発達しやすくなっているのに加え、日本近海でも水温上昇が顕著なことなどが原因。

*中心気圧の低い台風が東京に接近した頻度は、1980~1999年に比べ2000~2019年の方が2.5倍に。

*日本近海は、世界の中でも海面水温の上昇が大きいとされます。

*温暖化がこのまま進むと、今世紀末には台風の発生数は増えませんが強度は増し、より日本に近いところで強まるようになるとの研究報告が複数出ています。

（2020年9月8日 産経新聞記事より抜粋・引用）

(3) 太平洋側に接近の台風増加

東京は 1.5 倍 温暖化影響も

*気象庁気象研究所は 8 月、過去 40 年間のデータを解析し、太平洋側に接近する台風が増えたとする分析結果を公表。

*日本付近の気圧配置の変化や海面水温の上昇などが原因。

*国内の気象台などの観測拠点から 300km 以内に接近する台風は 1 年間平均で約 26 個発生。そのうち約 11 個が日本に接近。

*1980~2019 年の過去 40 年間の観測データを使って、日本に接近する台風の特徴を解析。

*太平洋側の地域で、前半 20 年間と比べて後半 20 年間の台風の年平均の接近数が増。

*主要都市では、東京が台風の接近数が最も増えていました。前半の年平均 1.55 個から、後半には同 2.35 個と 1.5 倍。静岡は 1.4 倍、名古屋は 1.3 倍、和歌山と高知は 1.2 倍に増えました。

*気候変動に関する政府間パネル（I P C C）は、21 世紀末には地球全体でみると台風などの熱帯低気圧の発生数が減少または変化しないものの、強い熱帯低気圧の発生数は増え、その最大風速や降水強度が増す可能性が高いと予測。

*台風の移動速度も重要。遅ければ、各地で台風の影響が長引くから。

*今世紀末には日本のある中緯度帯を通過する台風の移動速度が平均で約 10%遅くなるとの予測。

(2020 年 9 月 11 日 日本経済新聞記事より抜粋・引用)



(4) 災害時、百貨グッズで乗り切る

☆消臭バッグで汚物対策

- *消臭袋があると、悪臭を発生するゴミを入れておけます。
- *断水時、自宅のトイレの便器にセットする簡易トイレを使う際にも重宝します。

☆高密度ポリエチレン袋を使って調理

- *熱に強い高密度ポリエチレン製の袋に食材を入れる調理法は、ライフラインが止まったときに便利。
- *袋は高密度ポリエチレンを使っていると記載されているもので、「キッチンパック」などの名称で売られています。

☆皿やまな板にラップフィルムをかけて

- *水道が使えない状況では、汚れた食器やまな板が洗えなくなります。
- *断水中は「汚さない」が大原則。
- *食器やまな板にラップフィルムをかけておき、使用後はラップごと捨てれば洗い物を出さなくて済みます。
- *ラップは手に巻いて食品配布にも使用できます。
- *三角巾や包帯などの応急手当てに使い、腹巻や、目や顔面を保護するゴーグルの代わりにもなるなど災害時には多目的に活躍します。

☆ゴミ袋とペットシートで簡易トイレ

- *災害時のトイレ対策は大きな課題。
- *自宅のトイレの水が流せなくなったら、ゴミ袋を2枚重ねて便器に被せ、その中に吸水面を表にしたペットシートを敷きます。
- *使用後は内側のゴミ袋をはずして捨てます。
- *本来は非常用トイレを備蓄するのが望ましいです。

☆レインウェアを防寒着に

- *レインウェアを着る場合には、結露で下の衣服が濡れないように注意。
- *上下別のもは動きやすく保温性もあります。

☆ウェットティッシュで全身を拭く

- *全身を拭くには一般的なウェットティッシュより大きめで体専用の「からだふき」。
- *赤ちゃんのおしりふきだと肌に優しいです。
- *アルコールを含むウェットティッシュは手指消毒に使いましょう。

☆布粘着テープに書き置き

- *スマートフォンや携帯電話の電池が切れた場合の、アナログな伝達手段も確保。

*家族への伝言メモ用なら、紙や付箋より丈夫な布粘着テープが活躍します。
*空き巣被害につながりかねないため、家族や親族など関係者だけが見られる屋内に残しておきます。

*布粘着テープはガラス片を集めるなど用途は広いです。

*損壊した箇所の応急処置、物の固定、掃除などあらゆる場面で活躍します。

☆リュックにゴミ袋を重ね給水所へ

*給水所で水をもらうときは、専用の容器がなくてもリュックにポリエチレンのゴミ袋を入れる方法があります。

*リュックを大きく広げ、中にゴミ袋を2枚重ねて水漏れを防ぎます。

*リュックの容量の半分から8分目を目安に水を注ぎ、内側のゴミ袋をきっちり一つ結びにします。外側も同じ要領で結びます。

*両手が空くのは、災害時に大切なポイント。

☆凍った保冷剤を冷蔵庫に

*冷蔵庫内の貴重な食品を無駄にしないために、電気が止まったら早めに対策を。

*傷みやすい食材はカセットコンロで煮たり焼いたりして保存期間を延ばし、時間を稼ぎます。

*冷蔵庫も冷凍室も開閉は最小限にして冷気を逃がさないように心がけます。

*保冷剤は暑い季節、冷房が使えない時に体を冷やすのにも使えます。

☆使い捨て手袋で汚物処理

*災害時は衛生環境が悪くなるため、使い捨て手袋は必須。

*料理や掃除用のポリエチレン製の使い捨て手袋は、食中毒や感染症を防ぐのに役立ちます。

*排せつ物や汚物の処理のみならず、食材の調理・配布や傷病者の手当などにも活用

(2020年9月12日 日本経済新聞記事より抜粋・引用)



(5) 線状降水帯に「注意情報」

気象庁 豪雨警戒、来年から

*気象庁は、豪雨災害の原因となる「線状降水帯」が発生しつつある場合、2021年から新たに「線状降水帯注意情報（仮称）」を発表して注意を呼びかけます。

（2020年9月26日 日本経済新聞記事より抜粋・引用）

(6) 老朽インフラ 点検形骸化 橋やトンネル

未修繕5割 高まる危険、費用増加も

*老朽化した地方の橋やトンネルの5割が修繕などに着手できていません。

*5年周期で点検し、早めに対応するルールが形骸化。

*自治体が管理する橋やトンネルなどで、2014年度に点検したうち緊急・早期に措置を講じるべきだと判断したのは9497件。

5年経った2019年度末時点で修繕などに着手していたのは52%だけ。

国交省の所管は97%、高速道路会社は99%が対応に着手。

*築50年以上のインフラの割合は今後15年で道路橋で25%から63%に、トンネルで20%から42%に跳ね上がります。

*維持管理・更新費は2018年に5.2兆円。

場当たりの後手な修繕だけでは最大12.3兆円に拡大する見込み。

*日本のインフラは過剰とのデータも。

インフラの総量を示す公的固定資本ストックの国内総生産（GDP）比は米国で61%、ドイツで45%。日本は126%。

（2020年9月28日 日本経済新聞記事より抜粋・引用）

